

めぐりあいの

ふしぎに

手をあわせよう

坂村 真民

『2026年難波別院カレンダー』10月のことは

掲示板のことは

私が育児に奮闘していた時、「子育ても大事だけど、何のために生きるんだろう？」また「大学でお寺の住職になる資格まで取らせてもらって、私にとって意味はあったのだろうか？」と、ふと人生を振り返る機会がありました。

そんな時、大学時代のレポートがたまたま見つかりました。当時感じた素直な気持ちを読み返し、改めて私自身の出発点に引き返されました。それは、ある先生からの大切な一言でした。

その方は、大学を卒業した後も、折に触れ、お声をかけてくださり、様々な諸先輩方と話す機会も作ってくださいました。

その関係性は、現在に至るまで続く、大切な出会いとなりました。

そしてこの師友との出会いを通して、知識や教養を学ぶこと以上に、生きる姿勢を学ばせていただきました。たくさんの方々や言葉との出会いが、今の私の人生を支え、導いてくださっているということに、立ち止まり振り返ってみて初めて気づかされました。

出遇いの「遇」という字には、本当に思いがけなくあうという意味があり、たまたまめぐりあうという、私の思いを超えた重みを感じるのです。不思議な出遇いをいただいているのだと、自ずと手が合わさります。人との出遇いが私を「お育て」いただいているのだと思います。（大阪教区教化センター）

今月のことば

大寂定にいたりたま

如来の光顔たえにして

阿難の恵見をみそなわし

問斯恵義とほめたまう

陀如来の本願について説き始められました。『無量寿経』という大切なお経は、阿難の問いによつて開かれたともいえるのです。

阿難尊者が褒め

られたのは、お釈迦さまのほんとうのお姿に触れ、「なぜでしょうか」と問いを持ったからです。

この和讃を通して感じることは「大きな学びや気づきを得るには伝える側だけではなくむしろ聞く側の心持ちが大切である」ということではないでしょうか。

私たちも日頃さまざまな場面で人の話や教えを聞いています。しかし、自分に関係のないこととして聞いている時には、

なかなか心には残りません。ところが、「なぜだろう」「自分の場合はどうだろう」という問いを持った時、それまで聞き流していた言葉が急に身近なものとして響いてくることがあります。

例えば病院で聞く同じ医師の説明でも、健康な時と病気になった時では聞こえ方が違います。病気の時に聞く話の方が心に残るのは決して話の内容が変わったのではなく、聞く側に「なぜ自分は病気になったのだろう」「どうすれば私の身体は良くなるのだろう」と問いが生まれたからです。

私自身、日頃勉強をする中で、ただ教科書を前から黙々と読んでいただけではなかなか記憶に残

りません。しかし「あの言葉ってどういう意味なんだろう」と問いをもつてその答えを探すように教科書を開くと、見つけたその言葉と意味は記憶に残りなかなか忘れないように思います。

私たちも、仏法を聞く中で分からないことや疑問を抱きます。しかし、その問いを持つことこそが仏法を聞く入口なのかもしれません。

阿難の問いによつて阿彌陀さまの教えが開かれたように、私たちもまた、問いを持ちながら仏法を聞かせていただきたいものです。

(廣瀬 開)

今月のことば出典『浄土和讃』

『真宗聖典』(初版) 483頁

(第二版) 578頁

『増補 真宗大谷派 勤行集』

(青本) 129頁

「へ知ってる？ 仏事のあれこれ」

「帰敬式」ってなあに？



くやってみよう、帰敬式を縁に

大阪市 法泉寺 西川 禅慈

義父が亡くなり、後は頼むよと託されたお寺は、葡萄農家が多い地域で村の結束が強く人間関係も

ちの中で本気で人と向き合う大切さを教えていただき、また自分自身の姿勢が問われてきます。

密接です。そんなお寺の代務者になって7年目になります。ご門徒さんは大自然と向き合いながら葡萄を作り、汗と泥にまみれ日焼けした顔と手で合掌する姿には頭が下がります。村だからこそ『彼岸会』『永代経』『報恩講』は必ず、総代や婦人会が声を掛け合ってお参りに来てくださいます。そういう人た

私はご門徒さんとの深い関係を築いていくために、何をすればいいのか試行錯誤しておりました。月参りでのお話、お寺の掲示板や彼岸会の法話など、お斎でお酒を酌み交わし共に語る中で、とりあえずやってみようと始めたのが「帰敬式」でした。帰敬式は「仏、法、僧の三宝を大切にしてい

弟子として生きていきます」と誓いを立てる儀式であります。それは共に学び、新たな人生のスタートラインに立つということとです。誓いの辞(ことば)にもあるように、「阿弥陀如来は私を照らし、生まれた意義と生きる喜びを、生活の中で確かめながら、本当の自分の姿に目覚めるよう、導いてくださっています。」

日々の法務の中で感じることは、お亡くなりになってから「おかみそり」で法名を受けるよりも、生きていく今だからこそ帰敬式で法名を受け、学びの土(場所)を得る。人間の生き方、在り方を今共に問い学んでいこうという方が自然な感じがします。だからこそ帰敬

式は、浮き草のように風に吹かれ流されている生き方から、しっかりと立ち位置をいただくことで土に根を張り、私自身を見つめ直す出発点となります。大切な儀式だと考えています。帰敬式を受式する祖父母や親の背中を見て、また孫や子にその想いが続いて欲しいと願います。

「何事もやってみないと始まらない」と、生活の中で確かめながら、そんな思いで二、三年ごとに報恩講にあわせて帰敬式を執行しています。まだまだ道半ばではありますが、新たに仏弟子となられた方々と、「空過」しない生き方を自身に問いながら、今をどう生きるのか共に考えていきたいと思ひます。

仏教マンガ・仏さまのおしえ

絵：小川ゆきえ〈255〉

へんしん
変身スイッチ

